

メッセージアウトライン マタイの福音書7：1～5 「さばいてはいけません」

[1-2]「さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです」

ここから主イエスの山上の説教の最後の区分に入る。最初の主題は「さばいてはいけません」である。対人関係においてお互いにさばき合うことの禁止。これは非常に大切なことである。

しかし、気をつけなければならないことは、私たちはこの「さばいてはならない」という、みことば一本ですべてのことを推し量っていくならば、クリスチャンとは非常に軟弱で他の人に対してどのような意見も表明しようとしないう、またどんなことでも許容してしまう弱々しい人間になってしまう可能性がある。これは聖書の一部を強調することによって陥ってしまう危険な考え方である。

特にキリスト教会ではイエス・キリストの愛の精神だけが強調され、何事もさばかず、あわれみと赦しをもって交わるのが神のみこころであるという考え方がある。信条や神学的な立場の違いを盾にとって教派を分けるのは聖書的ではないと批判されることもある。教会でも教師や役員の忠告や指導が何か面倒なおせっかいのように取られることもある。しかし、私たちはこの「さばいてはいけません」とここでイエスが教えておられることの意味が何かをよくよく知らなければならない。

イエスがここで教えられていることは教会が下すさばきのことではなく、私的な非合法なさばき、個人が個人をさばき、非難することについてなのである。

教会において他の人に問題がありそうなときに、正規の手続きも踏まずに個人的判断で僭越にもさばいてしまうことが問題なのである。→マタイ18:15-17

この「さばいてはいけません」という言葉は厳密には「さばき続けるのをやめなさい」という意味で、教会の兄弟姉妹のあら捜しをしては中傷や悪いことを言いふらして回る習性、心のあり方が戒められているのである。

では「さばいてはいけません」ということの理由は何か。その第一はその後に続く言葉「自分がさばかれないためです。あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです」に述べられている。

人の悪口を言えば、その言った人もまた悪口を言われる。人と争いたくなければ、まず人のことを悪く言わないこと。同様に自分がさばかれるのが嫌なら、人をさばかないようにする。これはこの世の常識でもあろう。しかし、ここでイエスが言われているのは単なる常識ではない。ここで言われている自分をさばくお方とは誰か。それは人ではなく、神のことである。それゆえ、この1-2節で教えられていることばの意

味は「私事に関する個人的なことで人をさばくな、自分が神からさばかれることがないために」という意味になる。もちろんこのさばきとは永遠の滅びに追いやられるという意味ではない。イエス・キリストを自分の罪の贖い主、救い主と信じる信仰を持つ者はもはや滅びに行くことはない。しかし聖書はもっと別の意味でのさばきのことも教えている。

→ I コリント11:27~32「したがって、もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。だれでも、自分自身を吟味して、その上でパンを食べ、杯を飲みなさい。みからだをわきまえないで食べ、また飲む者は、自分自身に対するさばきを食べ、また飲むことになるのです。あなたがたの中に弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいるのは、そのためです。しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることのないように、主によって懲らしめられる、ということなのです」

この手紙の宛先であるコリントの教会では、ある信者が聖餐式の礼典をいい加減な気持ちで受けたために、神のさばきが下ったことが記されている。天国か永遠の滅びかというさばきとは違った主の懲らしめともいうべきさばきがあって、そのために病弱な者や死者さえも出たのであった。同様に私たちは主のみ言葉と教えを軽んじ、あるいは無視して、主の懲らしめを受けることがないように、教会の兄弟姉妹をさばくということをしてはならないのである。

しかし、もし私たちが人をさばくことをあくまで続けているならば、「あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられる」という言葉が実現することになる。

もし私たちのうち誰かが、ある人の欠点を指摘し、さばいて、自分の方がその点においては正しく品行方正で優れていると考えるならば、神もまさにそれと同じ物差しで、私たちの生き方、全人格を量り、その結果としてのさばきを私たちに突き付けて来られるのである。だれがこのような神のさばきに合格できようか。

[3-5]「あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目からちりを取り除かせてください』と、どうして言うのですか。見なさい。自分の目には梁があるではありませんか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます」

さばいてはいけない第二の理由は、私たち自身の目に相手よりずっと大きい「梁」が入っているからと主は言われる。「梁」とは家の屋根を支えている太く長く大きな木材のことである。

「ちり」とは土砂や粉末などの飛び散るもの、ほこりなどのことである。それを「あなた」は見えるという。そして「あなたの目からちりを取り除かせてください」というので

ある。なんとお節介なことか。そしてそんなことはなかなかできることではない。かえって目のレンズを傷つけてしまうであろう。そしてそのちりを取り除いてやろうという私たちの目には何と巨大な「梁」が入っていると主は言われる。

これは何のたとえだろうか。これは相手のささいな欠点、過ちを罪である、罪を犯していると断定し、それを取ってやろうという言葉にさばく者の姿を示しており、残念ながらそれを指摘している私たちの目には巨大な梁が入っている、すなわち高慢、自己義認、思い上がり、自己中心、愛と寛容の欠如、さばく思いなどで目がふさがれており、まともに相手を見ることさえできない状態なのである。しかもそれに全然気がついていないのである。それほど私たちは人の些細なことが目について、自分のことは何も気がつかない。私たちは目と同様に人のたましいのデリケートな点をもっともっと慎重に考慮する必要があり、自分のことを省みる必要がある。

5節には「偽善者よ」と呼びかけられている。これは心を偽る役者、俳優という意味がある。いかにも信心深そうに見えるが、その実はパリサイ人のように自己宣伝をし、自分をさも立派な信仰者だと評価してもらいたいという俗的な思いで動いている人のことを指す。私たちはこのような人物に当てはまらないかよくよく自分を点検吟味する必要がある。そして相手の状態がはっきり見えるようになるために、最も大切なことはまず自分の目から梁を取りのけることである。イエスは「もし自分の目に梁があれば」とは言われなかった。「もし」ではなく、必ず私たちの目には梁が入っている。自分の罪深さ、愛のなさということを徹底的に考えていくなれば、私たちの目には梁が入っていることに気づくことになるであろう。人には厳しく、自分には甘い、しばしば私たちはそのような者であることを思い知らされる。私たちは人の欠点をさばき、批判する前に自分の欠点を認め、それを取り除く真摯な思い、努力を神の前にしていく必要がある。そしてそのようにした上で、初めて相手のために行動することができるのである。

主なる神が、そのあわれみと恵みによって私たちを赦し、子として取り扱ってくださるように、主にある「兄弟」(もちろん姉妹も)をもまた私たちのちっぽけな批判ではなく、主によって立たせられるのだという信仰をもって共に助け合い励まし合いながら歩んでいかなければならない。それこそ神の喜ばれる信仰者、キリスト者としての生き方なのである。→ヤコブ4:11～12